

## 進捗状況の概要

本事業の目的は、エビデンスに基づく教育の検証と質保証という本学の改革方針に基づく「学修の質保証のための基盤整備」とそれを活用した「学修質保証システムの構築」である。本学は平成24年度「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（GGJ）」、平成26年度「地（知）の拠点整備事業（COC）」、平成27年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択され、次世代の地域社会を牽引するグローバルリーダーの育成に努めており、海外の大学や地域社会をキャンパスとする学生主体の多様な教育プログラムを特徴としている。本事業ではさらにアクティブ・ラーニングの質保証と、学修成果の可視化による学修の質保証を推進することで、自己の学修を振り返り、自己を深く理解し、新たな目標を設定し成長していく自律的学修者の育成を進めている。

「学修の質保証のための基盤整備」として、学修成果を記録し可視化できるeポートフォリオシステム Kyoai Career Gate（KCG）を平成26年度に導入し、運用を開始した。平成27年度には、KCGに蓄積した学修成果をエビデンスとして活用し、自己の成長を自ら評価することで学修の振り返りと次の目標の設定を行うことを特徴とした、自律的学修者育成のための「エビデンス・ベースの自己評価システム」を構築した。また、図書館を活用した取り組みとして、平成26年度から研修を開始したライティング・ピア・チューター制度（ラピタデスク）を平成27年度に稼働させた。ラピタデスクは初年次教育を強化するためのライティング支援を提供するとともに、チューターである上級生がライティングやコミュニケーションのスキルを向上させることも期待できる。ラピタデスク運用初年度の成果は、平成28年3月に Writing Centers Association of Japan 主催の“The 8th Symposium on Writing Centers in Asia”において、「学士課程学生によるライティング・ピア・チューターの有効性と課題の検討」と題しチューターの学生自身が中心となり発表した。

「学修質保証システムの構築」としては以下の4項目に取り組み、PDCA サイクル構築の基盤を整えた。まず、平成26年度にディプロマポリシーを見直し、平成27年度にはディプロマポリシーに基づく詳細な学修成果指標「共愛12の力」を策定した。シラバスでは「共愛12の力」と授業との対応を表示し、KCGにも学修履歴情報として自動的に取り込むことで、学修の振り返りと目標設定に活用できる体制を整えた。さらに、12の力それぞれの達成水準をレベルごとに明示した「共愛コモンルーブリック」を作成、周知することで、学生による自己評価の明確な基準を示した。2つ目はアクティブ・ラーニング（AL）の質保証として、AL授業の効果検証に取り組みとともに、外部講師によるFDを実施しAL実践力の向上を図った。また、各教員の特徴的なAL授業をまとめた「GOOD PRACTICE」を平成26・27年度に作成し、教員間の情報共有を促進した。平成27年度には公開シンポジウム「アクティブ・ラーニング～実りある実践に向けて～」を開催し、ALと自律的学修者の育成に関する外部講師による基調講演を行うとともに、本学の取り組みを広く外部に発信した。3つ目は学修成果の可視化による主体的学修の支援で、平成27年度には2年生以上の全学生に対し、学びの振り返りとそれに基づく自己評価を行うリフレクションの時間を設けるための全学的調整を行った（平成28年度4月に実施済み）。4つ目はこれら取り組みの全学的な共有と推進であり、全教職員によって構成されるスタッフ会議で、本事業の取り組みに関するスタッフの共通理解を深めるとともに、取り組みの改善に向けたワークショップを行った。また、同会議では教職員に対して教学データの分析結果を周知し、平成28年度の教育や学修支援の改善ポイントも明確にした。先進的な取り組みを行っている他大学への視察も行い、有用な知見を得ることができた。

さらに、本事業の基盤システムであるKCGは、平成27年度にKCG+S（ショーケース）の機能を実装し、学びと成長の記録を学生個別の学外公表ページとして自動生成する仕組みを整えた。これは就職活動時における「公開履歴書」としての利用を想定すると同時に、学生に対してeポートフォリオを活用する意義を明確にする役割も持っている。さらに、大学にとっては、学生が身につけた力のエビデンスとしての学修成果を、より効果的に公表する方法の一つとして機能するものである。